

士(サムライ)たちの富士山—大場維景の富士登山と「富岳真図」

<静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 教授 松島 仁>

江戸時代の後期、富士講による登拝が盛行するなか、武家たちの間でも富士登山が試みられるようになる。とりわけ士大夫、すなわち東アジアの伝統的な知識人としての自負をもつ一部の武家たちは、「万巻の書を読み、千里の路を行く」という理想のもと、富士山に登頂し、記録にとどめている。

そのひとりが水戸藩士の大場維景(これかげ)(1750~1826)である。以前より富士登山への念浅からざるものがあつた維景は、藩主徳川治保(はるもり)の許しを得て江戸の藩邸から吉田口に向かい、寛政6年(1794)6月16日朝から夜を徹して頂上をめざした。翌暁に日の出を拝した維景は、頂上を巡ったのち下山し、人穴や白糸の滝、浅間大社、三保松原などを周遊し、江戸に帰った。維景は自身の旅の模様を紀行文『富岳遊記』、およびそれを図解した「富岳真図」としてのこしている。

「富岳真図」は、小仏峠や吉田口、大田和(現、山梨県鳴沢村)、人穴(現、静岡県富士宮市)、上井出(同)、三保松原、吉原、箱根、白糸の滝から仰いだ富士山の姿を克明なコメントとともに写しつつ、頂上の風景を眼下のパノラマとともに描く。とりわけ頂上から望んだ日の出の記録は詳細をきわめ、維景の実証主義的な観察態度が確認できる(図版)。

「富岳真図」は巻末部分に佐野義行(のりゆき)と多紀元簡(もとやす)による跋(ばつ)をともなう。それらによると、同図は紀行文『富岳遊記』とともに11代将軍徳川家斉の上覧に供された。富士山について、江戸の地から望んだ富士山よりほか知らなかった家斉にとって、「富岳真図」に伝えられる場所と時間ごとに変化する表情は、興味を惹くものだったに違いない。

のちに水戸彰考館に収められた「富岳真図」の原本は焼失したものの、いくつかの写本が作られた。現存する「富岳真図」の写本のうち、このたび当センターの所蔵に帰した画卷は、信州松代を領した真田家に伝来した作品である。センター本には、富士山御縁年(庚申)に当たる寛政12年(1800)6月の年紀をもつ真田幸弘の跋も加えられる。

真田幸弘は松代藩の藩政改革を行った英主として知られるとともに、文雅の道に親しみ、和歌や漢詩に通じるほか、当時流行した大名俳諧の中心人物として活躍した。一方、幸弘は寛政の改革を主導した老中松平定信と義理の叔父・甥の関係にあり、両者の間には和歌の贈答など文化的な交流もみられた。そうした幸弘が手元にとり寄せ写本としたセンター本は、「富岳真図」写本群のなかでも来歴が確かで筆写年代も遡りうる基準作であり、失われた原本の様子を今に伝える貴重な作例といえよう。

10月1日から開催予定の特別展「士(サムライ)たちの富士山」の第二部「頂へのあこがれ」(11月3~27日)では、その「富岳真図」を初公開し、同じく将軍家斉の上覧に供した谷文晁筆「富士山中真景全図」や真田家に伝来した真田幸弘関係の絵画作品とともに一堂に展覧する。武士たちの富士登山を追体験いただければ幸いである。



大場維景原筆・小野正応写・真田幸弘跋 富岳真図(静岡県富士山世界遺産センター蔵)